



TITLE:

<批評・紹介>五四運動の研究（竹内實著「(8)周樹人の役人生活：五四と魯迅・その一側面」/吉田富夫著「五四の詩人王統照」）

AUTHOR(S):

木山, 英雄

CITATION:

木山, 英雄. <批評・紹介>五四運動の研究（竹内實著「(8)周樹人の役人生活：五四と魯迅・その一側面」/吉田富夫著「五四の詩人王統照」）. 東洋史研究 1985, 44(3): 529-537

ISSUE DATE:

1985-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154125>

RIGHT:

また、本書の後に「中國の寄生地主制——田面慣行——」（假題）が刊行されるとの事であり、ここ數年來、藤井宏氏との間で論争になっている一田兩主制問題で、草野氏の總括的論證が期待される。

（註）松田吉郎「清代臺灣の管事について」（『中國史研究』七、一九八二年）

同右「清代臺灣中北部の水利事業と一田兩主制の成立過程」

（『佐藤博士退官記念 中國水利史論叢』中國水利史研究會編、圖書刊行會、一九八四年）

一九八五年二月 東京 汲古書院
A5版 五四四頁 九〇〇〇圓

五四運動の研究 第三函

⑧周樹人の役人生活——五四と魯迅・その一側面——

竹内 實
吉田 富夫

木山 英雄

「周樹人の役人生活——五四と魯迅・その一側面——」

教育やジャーナリズムのことはいうにおよばず、文學のうちでも

王統照などともに讀んだことがなかったから、とりあえずは、勝手のわかりそうなこの分冊の標題一つを機縁に買つて出た書評である。それにしても少なくない所定の紙幅を、場合によってはこれ一冊分で填めても許されぬものではあるまいと高を括つたわけは、十何年も前に自分の勤める學校の圖書館に民國政府の官報（『政治公報』）がどつきり眠っているのを見つけたのがきっかけで、本書と同じ主題に関心を持ち、以後たまたま關連する材料を見かければそれを控えておくという程度のことではあつたけれど、しかし結局のところ、ほかのことにかまけ、また一つにはこの種の調べごとに本國の研究家たちが身を入れたのをよいことに、繁瑣な作業に従う熱意を失くしてしまつていたからである。つまり、傑出した取材力で聞こえる著者がこの標題で專著をものされたのなら、あわよくば書評に事借りて消え残つた關心に始末をつけることができようか、という虫のよい魂膽だった。

だが一讀した結果、その當てはまんまと外れ、どうも弱つてゐる。主な理由は、本書が完結していないことである。しかも未完の様態は卷末の「附記」によると少々複雑であつて、

本稿はもと「五四と魯迅」の題目のもとに構想されたものであるが、いま、みられるとおりこれを副題とし、「周樹人の役人生活」とした。はじめの構想からすれば未完であるが……主たる題目の範圍内ではいまのところなお四章を豫定しており、この後續の部分において、副題としたように、「五四」と「魯迅」がなぜ、「五四と魯迅」になるのか、いくらか解明できたらよいと考えている。しかし、ここに「その一側面」とした部分は、これはこれで一つの完結をあたえたつもりである。

とある。つまり、本稿は「五四と魯迅」の構想からすれば未完であり、未完ながらさしあたっての主題の範囲内でもなお四章分を缺くが、残る四章では當初の構想が正面から解明されるはずであって、當該構想の側面と銘打たれた副題の限りでは完結している、ということになる。變に拘泥するようだが、「運轉中に聲を掛けないで下さい」の喩えもあることで、批評が、まだこれから書かれるべき部分にまで干渉するような、うるさい所行は慎しまねばならぬからである。

もっとも、私が未完に氣づいた時の印象はよほど單純であつて、本書の主要な構成部分が、一九二二年五月、主人公の北京教育部赴任と同時に書きはじめられた日記のほぼ日を逐つての註解から成り、しかもそれが翌々月の分まで來たところで終つてしまうので、これでは役人生活のほんのとは口にすぎず、實際のところ、讀み了えてオヤと訝る思いが残つたまでである。にもかかわらず、これはこれでいちおう完結しているのだということは、著者がさすがにこの調子で主人公の役人生活を終りまでなぞるつもりではなくて、教育部兼事周樹人が、まだ魯迅としてあらわれてこない以前の段階を集中的に（かつ象徴的に？）語つておこうという方針に従つたためらしい。それは熟慮を経た上での手段かも知れなくて、著者もやはり本國の最近の研究動向を睨んで、その成果は充分に利用しながらも、彼らの調べあげた、「すべての状況を、この論文に吸収しよう」と意圖しなかった」（第一章註②）というような、別のやり方を工夫した結果かと推測される。

ざつと以上の次第で、事役人生活の記述に關しては、いちおう書評を拒まぬだけのものが提出されていると諒解せねばならぬらしい

とはいえ、著者の構想において、「周樹人の役人生活」と「五四と魯迅」がどうかかわり合っているのか、「附記」によつても本書の記述の全部によつても、なかなか見當がつかなくて、それも弱る理由の一つである。しかしとにかく、本書に書かれてある限りのところで、紹介と批評を試みるほかはない。

著者は本書の主題にどういう意味を與えているか。すなわち動機はどこにあるのだろうか。著者はまず、主人公には「魯迅」の名で知られた顔のほかに、中華民國政府教育部科長つまり役人としての「周樹人」の顔があつたとして、「（のちに役人をやめて）一つの顔だけになつてから、かれは一〇年しか生きられなかつた。しかし、役人であつたのは一五年、短いとはいえず、しかも人生で中年と呼ばれる時期である。この時期に特有であつた役人生活を見ることは、あながちに無意味ではないであらう」という。その意味をあながちに求めれば、何か鋭く問題を立てるよりは、常識にとつて氣がかりな空白を充たそうとでもいった風の、これは控え目な前置きである。しかし、もっと意味らしい意味は、それに續く次のような豫測の中にある。すなわち、文學者というものには役人生活ができないと考えがちの大方の先入觀にもかかわらず、主人公にとつては「そのどちらが必要」で、「二つの顔は補足しあつていたのかもしれない」というのがそれである。著者は、同じ先入觀から主人公の役人心理に興味を持つたらしい友人の郁達夫のそれとない質問や、自分にとって役所の仕事は役者が演技をするようなものと答えたという本人の言葉によつても、また、その言論と仕官の事實との矛盾を衝いた論敵陳西滢の惡意充分な攻撃や、陳の如き教授も自分の如き官僚も國家から俸給を得ている點で一つ穴のむじなど反

聲した本人の言葉によっても、さらにまた、教育總長章士釗によって部の職を免ぜられて平政院に告訴した際、辭めてもよいが相手は辭めさせるのは筋が通らぬから争うといった本人の論理などによっても、その豫測は影響を受けないといっているようだ。その根據について、同じ調子で要約を續ければ、たとえ最終的に役人を辭めたことが、或る苦痛や矛盾の解決だったことを認めるとしても、とにかくにも一五年役人を勤めあげた事實自體が、主人公にとって役人生活を送ることに少くとも根本的な迷いはなかったことを物語るからだ、ということになろう。こうして、かかる事實が豫測を裏づけているのだから——このだからは要約者の苦しい論理移入である——だから「われわれはまず、かれがどのような北京生活、北京における役人生活を送ったのか、そのありさまを見るべきではないだろうか」という風に動機づけられて、主題は導入を終る。これが第一章の要旨である。章末の「一五年にわたる北京生活を、その細部に固執して追跡することは、まったく不可能ではないとしても、ほとんど不可能に近い。しかし、いくらかは、眺めることができるのではないか」という譲歩は、右の動機ならびに主題が第二章以下のような形で展開されることにかかわるものだろう。

以下、一九二二年五、六月の全日記（第四、六章）と、七月の日記の一部分と郷里で水死した友人范愛農への悼詩全三首（第七章）のいわば講解に、主人公の教育部入りを仲介した同郷の先輩蔡元培と親友許壽裳（第二章）、最初の赴任先の南京臨時政府教育部（第三章）、北京入り當初の寓居紹興縣館と北京城（第五章）、「京官」としての役人生活（第八章）に關する記述が交互に組み合わされ、後者の部分では、三箇月足らずの日記では盡しきれぬ先のことに

も、手際よくいくらかは觸れている。全體として、日記所出の人名、地名、書名、事件、機關等の細大漏らさぬ註解と、比較的大きなまとまりのある關連事項の詳説、それに隨處で挿話や考證をも交える形で一書は成る。

本書の周到な註解ぶりを具體例に見るなら、六月二十一日の日記「……夏期講演會に赴き、美術略論について講述……共和黨事務所の信を得」のところで、まず孫英（魯迅在教育部）や陳漱渝（魯迅史實雜考）の最近の調査、研究に據つて、教育部主催にかかる「夏期講習會」のあらましを述べたのち、すでに第二章で詳しく説明した蔡元培の「美育」主義と主人公の美術觀との關係に觸れ、さらに陳氏の論文に引く『亞細亞日報』の講習會に關する報道記事全部の寫しを社會科學院の「汪向榮先生」に依頼して入手できた限りに註に收め、その記事から講習會の時間割表まで作つて本文中に掲げ、それから講師陣に名を連ねている嚴復や章太炎の話に轉じ、共和黨との關係を含む章のこの當時の政治行動の概況とそれに關する魯迅の後日の回想に及ぶ、といった具合である。これはたまたま役所の仕事に直接關係ある場合の例だが、そうでない事項についても、著者の註解のしかたにはずいぶん徹底した趣きがあつて、たとえば、第一章に出てくる陳西滢が主人公の仕官の事實を嘲つた徐志摩宛書簡は、もと陳と周作人とのちよつとしたいざこざを發端とする『晨報副刊』上の諸家往復書簡十餘通のうちであるが、この一連のやりとりの主なところを實に七ページに達する註で紹介したり、魯迅日記のことを、用紙、體裁、冊數、字體、刊本、全集における註釋から「標點符號」などにわたり、本文だけでは足らずに註（三ページ）まで使つて詳説したり、感に堪えるほどの例は、もっと細

かいところにも数え切れないくらいある。こうして、この未完結の一分冊に盛り込まれた知識の量だけでも、實にたいしたものだといわねばならぬが、しかもこれらを、奇特定の普通讀書人の味讀にも耐えるように配慮している著者の苦心も、また大抵でなかったろう。あるいは、事實を丹念に解説する點で、それは何も別の配慮というものではないのかもしれないけれども。

私などには、時にいささか偏執的ときえ感じられる丹念さも、むしろ著者にとっては必然的な、いわば註解的方法のうちなのである。そこで、第一章の「細部に固執し」という言葉が、前後の脈絡を越えてでも想い出されてくる。著者は、一五年にわたる役人生活をそういう態度で「追跡」することのむしろ不可能をいつたわけではあるが、續いて「しかし、いくらかは眺めることができるのではないか」という「いくらかは」は固執の度合でなく、一五年の期間をずっと短く譲歩する意味に取ることが可能だから、脈絡も必ずしも無視したことにはならぬと思う。そして私は、著者が眞實は細部に宿るとでもいった信條一般に傾いているのかどうか、そういうことを何も知らないけれども、本書に固執された文獻的その他いろいろな意味での細部が、主人公の役人生活の實情に關して固執さるべき細部と、どういう關係にあるのだらうかということを考える。そして少し懷疑的な感想に傾きかかる。しかし翻つて思うのに、私は日記を念頭に置きながら註解の方法などといったが、本書には方法よりも趣味と呼ぶのが似つかわしいような、愉しい雰囲気もあるのだった。それはたとえば、中國人が「文壇掌故」だの「北京城掌故」だのという、あの「掌故」の趣味に近いものではなからうか。たしかに本書には、ただ片端から事實を調べあげる劍幕とちがっ

て、風土文物や故事因縁に興ずるというのか淫するというか、そんな風のところが、しかも著者が意圖して、當の主人公の役人生活に體に、そういった雰囲気の中で捉えるのにふさわしいものを、匂わせようとしているふしもないではない。そうだとすれば、主題と方法の間にありうる隙間を或る種の趣味性が補填する、といった事態も考えられる。

ともあれ、本書のそのような方法、趣味が、主題と噛み合っているところを見ることにする。

紹興縣館と北京城の章はとりわけ「掌故」趣味の豊かな部分であるが、この會館に主人公が落着いた時、かつてその祖父が同じく北京の役人としてここに住んだ時に仕えた老「長班」がまだ生きていて、祖父と妾の喧嘩の思い出話などを聞かせては彼を閉口させたという逸話を、著者は周作人の回想から引いてくる。この話自體がいかに面白い。だが著者の目的は、ここからさらに祖父周福清のことに説き及ぶだけでなく、章を隔てて最後に「京官」としての周樹人という觀點で本書のまとめをつけることにある。

「京官」は、もはや基本的に共和制民國のたてまえと兩立しがたい類型ではあるが、著者はその名實が會館の老「長班」の意識などをその尤なる例として、清王朝の倒壊と同時に過去のものとなったわけではない所以を強調し、清末から民國初期に通じるその「京官」なるもののありふれた生態や世間的地位を、同郷の著名な「京官」李慈銘に關する研究（張德昌「清季一箇京官的生活」）などから効果的に例示する。このあたりは、私のもっとも啓發されたところである。

ここで興味深いのは、著者が同じ「京官」身分の祖父周福清から

孫周樹人への再現というめぐり合わせに浅からぬ心入れをすることである。といつても、べつに因縁漸に耽っているわけではないのであるが、とにかくこれは著者自身も氣に入つた着想であるらしい。事實また主題に沿つて思考が構成的に刺戟される點で、これより目ぼしいところはほかに見當らぬくらいである。ところで、單なる事實としていへば、祖父が清朝の「京官」だったことと、孫が民國の「京官」になつたこととの間に、直接の因果關係などありはしない。何か關係があるとすれば、その事實が孫たる主人公の生活において實際因果な意味をもつ場合だろうが、さしあたつては、著者の心入れによる關係づけがある。そういう心入れを、周樹人の役人生活を前時代の影を色濃くひきずつた歴史的な淀みの上に、それも魯迅のイメージからのあてずっぽうでなく、据えてみる試みというようにやや一般化した上で、それは有益な試みだと私は考える。しかし一般論は措くとして、今といった具體的な形の心入れに主人公が應答したかと思わせる、次のような挿入部分は、どういう意味をもつのだろうか。

北京にきたとき、周樹人には舊王朝の北京城にきたという印象もあつたろう。祖父は「京官」、その孫も「京官」と呟いたかも知れない。新しい共和國の創業にくわる官吏だ、という誇りをうちけさなかつたとしても……「京官」がどのような（きらびやかな）地位か、かれは知らないわけではなかつたとおもわれる……だが、長班がなつかしみ、尊敬すればするほど、かれは時代の變化を感じないわけにはいかない。といつて自分の内心に自分をくすぐるものがないわけではない。閉口せざるをえなかつた。こういう忖度が情理に叶つていないのではない。まして想

像を交えることが問題だなどとは思ひもしない。しかも、ほかならぬ忖度の情理めくところがくせものではないか、という疑惑が私をとらえる。おそらく、老「長班」の登場が主人公の北京生活の一挿話であつたように、この場面も主人公の役人心理の一挿話にすぎないのであらう。事實この部分はするようにさりげない形で挿入されている。けれども、前にいつたように、ここは本書の主題が構成的に展開するほとんど唯一のところであり、その構成を仕組む著者の心入れが主人公の内心に立ち入るという點で、なかなか微妙なところでもあるのだ。そこで、この挿話は挿話なりに、著者に代つてものをいう。そのいうところは、第一章の要約で紹介した著者の豫測、つまり本書の主題を支えている動機にかかわることにちがいない。

豫測の内容は、主人公その人にとって、役人の顔と作家の顔はどちらも「必要」で、互いに「補足」しあつていたのかもしれないといふにあつた。「必要」の方は、單に食わねばならぬ、書かずにいられぬといった判り切つた程度の意味かどうかはつきりしないけれども、とにかく「補足」しあうというような關係は、當然、事實としての問題でなく、主人公にとつての意味に關する領域である。意味を考えるには、主人公の内心に立ち入らなければならぬ。しかしその場合の主人公は、「ふたつの顔」を演じ分けるにしろ渾然とまたはギクシャクと引き受けるにしろ、はたまた今は一つでもやがてもう一つを表わそうとしてゐるにしろ、いずれにしてもまるごと一個の人格としてあり、その内心は插話的な場面心理と無關係でなくとも、所詮はその人格を貫く思想としてあるわけである。

さてそういう領域にわたるはずのことを、著者がこのような挿話で片づけようと意圖しているとはいわぬけれども、ここの忖度を含む本書の個々の判断の傾向性が、單なる事實の註解とは別に、趣味性にいうともなしにものをいわせる形で、かの豫測につながっている面があるのを否定できない（細部への固執ならぬ偏執も趣味のうちであろう）。そして、こういう挿入部分の意味が結局のところはよく判らなくて、徹底した丹念さに充ちた本書が、肝腎なところで案外ここもとないつくところを見せたように感じる、というのが私の疑惑のあらましであるらしい。

念のために、いまいったことと關係があるかもしれない、何か意味がありそうでそれがよく判らぬといった書き方の例を一、二あげる。さきの會館の老「長班」の挿話をきつかけに、著者は祖父の官歴や、よく知られた科擧にからむ贈賄事件のことに筆を進める。それから蓄妾やこの事件の結果を家族に對する祖父の仕打ちの面から捉えかえし、しかしそれを根據に推論するというのではなく、「（長子たる主人公の）祖父に對する深い怨みは、かれがこの事件について一言も記していないところにもあらわれているが」とさし插む。魯迅が祖父のことに文章でふれなかった理由を、このような祖父への直接的感情に歸するのは、一説として成り立ちうることであろうが、ここはそんなことの論證を必要とする場所でもないから、本書にはこのような見解のおこぼれもある、と別の感心をしておけば済む。しかし、そういう主人公の感情などには無頓着な老「長班」はまだしも、親友の許壽裳までが「たのまれもしないのに、いたずらっ氣を起し」祖父の殿試の答案を教育部の倉庫かどこから探し出してきた、というぐあいに怨みの話はまだ先へ續くので、判らない

のは、「季市、殿試策を搜し清し、祖父の巻を得、歸る」という日記を引くのに、「それを記した魯迅の文章には、不思議に反撥は見られないのである」とコメントするところである。不思議というのはむろん深い怨みが前提だからだが、その前提にくみしたとしても、すでにいい年になった主人公が、こんな場所ですんなり珍奇な文書を示されたことに反撥するものかどうか。假りにそうだとすると、そのことをいちいち日記に發散しなかったのが不思議だとは、とてものことと思えない。そして、文物としての日記にあればど情熱的な説明を加えている一方で、著者はただの日記の簡略な本文にいったい何を見ようとするのか、と妙な氣持にさせられてしまう。しかし本當に判らないのは、假りにそれがたしかに不思議だったとしても、不思議だからどうだということなのか、いくら前後を読み直しても判らぬことである。曰くあげとは、こんなもののいいようのことでないのか。

もう一つは、本書の最後のくだり。著者は「京官」の問題に續いて、主人公の俸給の受領状況の問題に移る。當時の北京政府の有名な給料運配問題と日記の記録とからして誰しも興味だけはもつところだが、著者はそれを意欲的に取り上げて、詳しい吟味の結果、「よく民國時代の否定面がいわれ、政府職員の給料の運配がその事例としてあげられることがある」割には、初めの約八年餘についてみる限り、意外に順調に近い形で、月俸二百から三百元の支給があったという結論を下している。これはこれだけの事實の指摘にとどまるとはいえ、類推的な固定觀念に細部にこだわる目で訂正を加え、かたがた民國政府下における主人公の役人生活が、何かその名目に値いしないような變則的なものだったわけでは決していないとい

うことで、著者固有の判断の一部を荷っている。日本の明治以降の官僚身分などからは魯迅の言動が理解しにくい、というような別の固定観念に對して、同じ運配問題を逆の方向に強調することも無意味ではないだろうが、それはそれとして右のくどりはまだ判る。判りにくいのは、このあとのしめくりに、運配配のひどくなつた一九二三年に主人公が苦しいやりくりをして新しく購入したいものの「魯迅故居」にあたる西三條胡同の家屋が、結局あしかけ一五年にわたる「京官」生活が生んだ「唯一の財産らしい財産といえるかもしれない」ことをいい、最後にこの家が「かれのつましい「京官」生活のささやかな記念ともなつたといえよう」と結ぶところである。「つましい」という形容は、前段で明らかにされたところとは自然に連続しない。毛澤東が北京大學圖書館助手になつた當初の月俸が八元だつたとか、一九二〇年頃の小學教員の「生活費からはじき出された平均希望年俸三一八・二四元に對して實際の平均年俸はその半分の一六〇・二五元であつた」(本函四分冊四三ページ)というような例を考へ合わせても、月俸二、三百元が順調に近く入つた生活を、その金を出て行き方に觸れずにそう形容するのは、説明不足というべきである。そこに一つの唐突さがあるのは、些細なことだとして、そもそも最後に家屋の購入の話に轉じて、それをいささかの詠歎をまじえるが如くに「紀念」と意味づけることで、著者はこの章の、またひいては一書全體の敘述に關して、何をいおうとしているのだろうか。何かありそうでもかも判然釋然としない例である。

本書がもし、「役人生活・その一側面」、またはいっそのこと「役人時代の日記・その一部分」というものであれば、事はもっと

簡單であつたろう。それはしかし、續きの部分で説明されるという「五四と魯迅」はおろか、第一章の導入すら無視した亂暴な假定にすぎない。しかも未完結ということに最大限の配慮をはらうべきだとすれば、導入と現に書かれた部分との間で本書の形式論的研究をしてみるはかなかつた。論評の苦しさはそこに由來するので、毛を吹いて疵を求める苦心とは關係のないことであつた。

「五四の詩人王統照」

本書は詩人、もう少し具體的には「新詩」作家としての王統照に、全體的な光をあてた勞作である。著者はその詩を通じて「五四の心」を探るということを目的に謳っているけれども、本書の前提から歸結にわたつて、王統照は「五四の詩人」にはかならないのであるから、これは詩人王統照を正面から紹介・論評したのと同じことであり、事實上もそういう勞作として、本邦初の研究という名譽にそむかぬ内容をそなえている。

單純な二章構成の第一章「獨行者の悲哀」で第一詩集「童心」を、第二章「時代の試練のなかで」で第二詩集『この時代』から最後の第五詩集「江南曲」までを扱い、詩人の生活歴や時代の背景に注意しながら、各時期の問題作の實例に即して詩作の展開を跡づけるのが本書の内容である。具體的な跡づけであるから要旨を紹介するわけにはゆかぬが、「五四」の昂揚とその挫折の下での「暗い覺醒」から、「抗日」の歌における民族との一體感の獲得に至るまでの詩人の歩みが、その現實認識の深化過程を基軸に通觀されている。そしてその歩みが、たとえばイデオロギイ的轉變などでなく、「自己の領域を誠實に守ることを通して(現實)や(政治)に誠實

であろうとした」というような、或る内面的態度の持續として跡づけられるところに、詩人が「五四の詩人」たるゆえんが確認されている。「五四の心」とか「五四の詩人」というものは、本書の「はじめに」や「むすび」の記述によればもつと多義的で、それが提起する問題もいろいろあらうけれども、はじめにいった理由でここには立ち入らない。

さて短い書評とはいえ、王統照の詩業に從來どおり無知無關心のままではさすがに心苦しいので、私は本書に教えられ、近刊『王統照文集』の詩作全部を収める第四巻だけは忽卒ながら通讀してみた。そして名前だけは誰もが知っていながら、誰もまともには取り上げたことのない（ないであらう）この地味な作家が、たしかになかなか輕視しがたい詩人であることを、感銘深くも知らされた。だいいち、「五四」運動から「抗日」戦争までの歴史を、むしろその間に幾つかの起伏は経ながらも、終始現役の「新詩」作家として生き抜いたことと體が、稀有な文學史的事件でなければならぬ。それは、傳統的舊詩と民間の歌謠（政策的な民歌運動だけのことでない）の両面から、所詮はハイカラ文學青年の青くさい自慰にすぎないのか、というふうに問いつめられてきた新詩の運命を考える際には、最先に参照すべき實例の一つにちがいない。つきにこの詩人が、想像と共感を柱とする素朴かつ基本的な詩觀を堅持することにより、流派や意匠の消長から可成り自由な場所で作作を續けた、という印象がある。おそらくこの人のメランコリー親和的な氣質と關係があるかと推せられる、自己の言語的秩序への固執もあらわな晦澁さを伴うその詩風の展開は、われわれの力ではまだよほどおぼつかない新文學の詩的言語の發育史通觀のための、少くとも信頼に

値する標識となりうるものではなからうか。

以上の感想はただちに、著者が率先してこの詩人に注目したことの意味と、いまなお頼るべき詩史の見通しに乏しい條件の下で、この詩人の決して少なくはない詩作の跡から一定の理路を取り出すことの困難とを傍證するだらう。實際よくやられたものである。

紙幅がないから讀み慣れぬ作品から得たふつつかな印象ではあるが、それをもとにあらためて著者の見解を聞きたいと思うことを、一つだけあげる。著者によれば、『夜行集』の第三輯は、「モダニズム詩を集めたもの」と解することによって、はじめていろいろと腑に落ちるということである。しかもこれらの作は「表象がやたらと思わせぶりに難解で、一口にいって出來がよくない」ので、したがって「これらの作品の存在は詩人にとっては一つのエピソードのようなもの」とされ、『夜行集』第一輯から『歐游集』へとたどって來た線は、このエピソードをとびこえて次の詩集へと延ばさなければならぬ」ことになる。ここに「モダニズム詩」とは、「この時期、詩人は當時一部で流行していたモダニズムを試みた」との意味でいわれ、また「次の詩集」とは、「抗日」を熱烈に歌う『横吹集』と『江南曲』を指している。

それはしかし當たっているだらうか。『夜行集』第三輯の詩篇は、つまるところ、作中の言葉を借りれば民族のかすかな「生機」を問うモチーフの切實さによって、著者がいうような前後の延長からべつに孤立してないと私には受け取れる。難解は難解でも、言葉の意味性にことさらに逆らうというような傾向での「モダニズム」の「流行」とはあまり關係がないのではないか。著者がその最終連を譯出している「誰能相信是快到了垂暮的時光」という題の一篇につ

いて見ても、最後の「遺餘下没害死的嬰孩撫着創傷」の句を、「殺され残った嬰兒が傷を手當てしている」と簡潔に譯すのは、上述のような解釋によりイメージの効果を重んじるからであらうが、おそらく例の「子供を救え」という、それこそ「五四」的な叫びの更に追いつめられた形と解せないでないこの場合では、「遺餘下」という意味の脈絡は省略しにくいと思う。そこで、この一首を「暑い夏の日暮れ前のやり切れない倦怠を歌ったものらしい」とする著者の倦怠という語の用法も問題になってくる。詩の「モダニズム」を云々する文脈で倦怠といえ、その意味は相應に限定されたものと判断するほかないが、著者はこの語を同じ詩の中の「疲倦」の譯語としても意識しているらしい。というのは、第一章で『童心』の「疲倦」と題する詩の譯文を読んだ時にも同じことが氣にかかったからであるが、どっちの詩においても、原文「疲倦」は、疲勞、疲弊といった直接性以外の知的な氣分などを含意してはいないはずである。これは王統照の詩風一般の理解にかかわることであろう。そして、『夜行集』第三輯のこのような性格は、藏克家（『王統照先生の詩』）が「自然の風景に對する感受に人生問題をからませる」と特徴づけた上で「風景詩」に分類した一群の延長上に置き、さらにのちの『江南曲』の第一輯（この輯分けは『文學叢刊』本に據る）に多く見える、江南の風景の獨自な諷詠に抗戰の要求や決意をからませる種類の抒情詩につなげるのが適當ではあるまいか。

「モダニズム」の嫌疑がかかるのは、猥雑を極める上海の息づまるような空氣が、詩人の風景を甚だしく内閉的に心象化させたためで、一般の「抗日」機運の昂揚と自身の行動參加によって開かれた心に、それが痛ましいなりにおのずと自然性を恢復して、母なる

「江山」に變ったとしても、この間に詩人の有力な手法は、浮氣というほどのことはなく一貫していたのではないか。

著者が第二章で、こういった「風景詩」に重きを置いていないのは、時々書かれる長篇敘事詩の問題作に觸れぬわけにゆかぬためでもあったろうが、私はこの系列に可成り關心をそそられた。それは、詩人自らがこれらの作中でしばしば舊詩的な風景感覺を意圖的に對象化しているように、この系列が自然諷詠の傳統の新詩における斷絶と繼承といったことまで考えさせつつ、しかも新文學の詩的表現の一つの到達點を示すように思われるからである。また著者にしても、これらにもっと注目していたら、直接に「抗日」を歌う詩が時時うわずつた調子になるのをとらえて、「抗日」の大義における民族との一體感が、一方で詩のスローガン化をもたらしかねなかったことを問題にし、しかし結局のところは、「自己に對する誠實」や「内面的視座」が詩人をそれから救っている、というような尤もな議論で本書を終ることはならなかったかもしれない、とも考えるのであるがどうであらう。

〈評者附記〉④平民教育運動小史（小林善文）⑤五四期のジャーナリズム（小關信行）の兩分冊をついに取りあげるに至らなかつたこと右のとおりで、それぞれの著者に對し遺憾に思います。せめて、輕視とは反對の理由によるものと、諒解ねがいたい。

A5版 ⑧一八六頁 ⑨二二五頁 八八〇圓

一九八五年 一月 京都 同朋舎